

# テロのリハなら新宿へ

【東京・新宿IIビル特約】テロ事件後も、新宿のゲーセンでは、ニューヨーク上空を戦闘機で飛行するシミュレーション・ゲームが……

アメリカを支持するもの、ラディンを支持するもの、そんなことはどうでもいいもの、人様々だ。人様々に感想を持つてくれたまえ。

日本という国の一番の繁華街新宿というところでは、こんなゲーム(写真参照)が平然と行なわれている。

ニューヨーク上空を戦闘機で飛行するシミュレーションばかりでなく、今

第2巻第0号  
通巻第36号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015 ©からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : [colors@go-karasu.com](mailto:colors@go-karasu.com)

目は閉じることが出来る。けれども、耳を閉じることが出来ない。事実上、年中無休で働き続けているのが耳である。そのおかげで、睡眠学習などということも可能になるのだろう。眠っている間にまで学習したっていいじゃん、などという意見が聞こえそうではある。それはそうだ。睡眠は何のためにあるのか。いろいろな意見があるようだが、心身を休ませ、明日に備えるということがその主たるものであることは間違いないだろう。そうすると、睡眠学習は本来休養すべきときにまで活動していることになり、何らかのデメリットを生じさせているのではないかと勘繰りたくなる。それとも、看板通りの一挙両得なのであろうか。

活動休止を考えていたら、例によって、大幅に回道をしてしまった。

からす新聞の母体であったカラースが休止した。それなりの感慨はあるけれど、実を言うと、特別な感慨はない。「万物流転、つまり、万物の根源は永遠の変化の中にある、という、わかるようなわからないような、けれども、私の非常に好きな言葉がある。二五〇〇年ほど昔、ヘラクレイトスが説いたとされている。考えてみると、確かに、生命あるいは宇宙の本質は変化にあるのかもしれない。二〇年前の私、一年前の私、昨日の私、一秒前の私、今の私、一秒後の私、明日の私、

（最終面に続く）

## 今日の紙面から

二・三面(ワウル面)

松本と話そうピンポンパン

四・五面(からすライブラリー)

本 『アウエーで戦うために』

CD 『雲射抜ケ声』

映画 『ショー・ミー・ラヴ』

六・七面(文芸面)

マリコの庭

八面(B面)

ヤンレボの××××

九面(国際面)

ロンドンレポート



などなどなど。私もあなたも、猫も杓子も、常に変化している。カラースだって同じこと。実際のところ、変化こそが万物の(少なくとも生命の)本質なのだ。

ところが、その一方で、あなたはいつになってもあなただし、私はいつになっても私なのである。自己同一性、世に言うアイデンティティ。

仮に、私が警察か暴力団か国際的な秘密組織か、とにかく何ものかに追われ、逃亡せざるを得なくなつたとして。全身を整形して現在の私とは何一つ重なるところがなくように変身し、見知らぬ土地に潜り込んで秘かに生きていくでしょう。幸いなことに、追っ手の目をままと欺くことに成功したとして、それでも、私が私でなくなるわけではない。他者になりすました私になるだけだ。

体中の細胞が全て入れ替わるのに、どのくらいの時間が必要なのだろうか。具体的ことは専門家に任せるけれど、無限に近いような膨大な時間がかかると思えない。全ての細胞が入れ替わってしまうと、強引に言えば、物質的には別物になつてしまふのではないか。けれども、私は私である。不思議じゃないかい。

つまり、変化し続けながらも同一であるもの、それが生命の、私の姿なのである。

からす新聞は××××

が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できません(無茶じゃない範囲で)。



撃の時には味方のコーチを3塁脇に置ける。そしてそこからはピッチャーのボールの握りが見える。つまり次に投げる球種が予測できる。に佐々木の次に投げる球種を読ませ、バッターにサインで伝えさせていたのである。これがまかり通る日本球界に佐々木はすっかり嫌気をさしてしまった。イチローも然り。記憶に新しいが昨年彼は徹底的に内角を攻められ徹底的にボールを当てられついに負傷し、シーズンの後半は出場できないでいた。これでイチローは気持ちが悪切れてしまった。

そう、だから今の大リーグ人気を演出しているのはまさに日本球界のこういう陰のつまらない部分なのである。

このあいだもテレビで巨人―横浜戦を見ていたが、ヒットで出ていた清原がなんとまあ、隠し玉でアウトになり、一気にチェンジとなった。一気に興奮めだ。どうせ今年から監督になったあの陰湿な森の入れ知恵なんだろうが、そんなことして勝った1勝にどんな価値があるんだろうか？

勝つためだったら何だってありでいいのだろうか？それで入場料にペイしたと考えているのだろうか？

こういう状況の中、アホなやつはすぐ「巨人という巨大戦力が一人勝ちの状況を作り出してリーグをつまなくさせている。」なんて言う。が、そういう自らの陰な気持ちが残計日本球界をなおさらそうさせているのにまったく気付いていない。大リーグには「ニューヨークヤンキース」なんていう超巨大戦力常勝球団があるがそれが大リーグをつまなくさせているなんて聞いたこともない。むしろ、どの球団も、ならばヤンキースに負けないようにと熱心に経営努力し、資金を作り、スターを連れてこうとしてくる。だから例えば今回のイチローをとって今のところ大成功しているシアトルマリナーズにしたって資金力は大リーグでは中の上くらいであるのに、昨年までのチームの主軸、アレックス・ロドリゲスを大リーグ史上最高額の315億円もの大金でテキサスレンジャーズ(いまのブッシュ大統領が元オーナーだった)に移籍させ、それで得た莫大な資金を基にイチローをゲットしたのである。まさに金の力である。だから巨人のせいで日本のプロ野球はつま

なくなっているなんて言っている奴らには大リー

グを賞賛する資格はないのである。

それにしても、このあいだのポストレッドソックスの野茂のノーヒットの試合は偶然、朝からテレビで生観戦できたのだがすばらしかった。敵味方関係なく、観衆、そして選手が野茂の一球一球にかたずを飲むのが聞こえてきそうで、ついに最後のバスターを打ち取った瞬間には、彼らの歓声が一つになり、弾け、球場はそれで溢れかえった。ちなみに、それは敵地でのことである。

## ピン、ポン、パン

今日なんか、(5/20)海はもう夏でした。

日の照り返しは目に痛いし、浜の女の人の装いは目に嬉しいし、波の色はますます鮮やかになってきました。そう、初めて見たんだけど、魚もサーフィンするんだよ。しかも、心地良さ気にうれしそうに。ほんとだ。すごくそれが伝わってくるんだよ。全然、人間なんて特別じゃない。そもそも、人間が他の種と違う根拠とされる知能なんて人間が作り出した、自らの価値を高めるための勝手な尺度に過ぎない。

そんな魚を見てとても可愛らしく思った。魚は食べ物以上のものにはとつこの昔からなっていた。が、とはいえ食べ物でもある。そして今日よりも明日はもっと美味しく魚を食べられそうなのがする。

鯨やイルカを食べるな、という連中の論拠は、2つ。知能が高いから、と可愛いから。

知能なんていかにうさん臭いか、さっきも言った。あと、じゃ、仮に知能という尺度を認めたとしてもなぜ知能が高いと食べてはならないのか。

可愛いなんていうのは全く個人的な尺度だ。そんな個人的な尺度を押し付けられてもかなわない。それに、可愛いという感情はその対象を喜びと共に受け入れていることである。ならば、食すという行為になんら反発しない、どころかおおいになつていく。なぜなら、それは最高に対象を喜びと共に受け入れることだからだ。食すという行為は最高の愛情表現ではないか。だから、オレらは「頂きます。」といって手を合わせてきたし、西洋のみなさんだ。って、「アーメン。」なんていつて十字を切ってきたわけだ。

そう、だからますます魚を食べたいと思うし、

鯨だつてイルカだつて食べる機会があれば食べる。

今、曲を録音している。「湘南1号」というやつだ。こつちに移つての最初のものだから、「湘南1号」ってわけだ。録つてとても楽しい。自分の今までの曲にない、凄く映像的な音。音で絵が浮かぶものになつてきている。爽やかなエッチなダンスソングになりそう。

「踊ろう、海の中で、愛も金も忘れ、いまず、yeah, yeah, yeah」って始まる。実際の波の音は入ってないけど(入れようかとも思ったけど安易だろ)それがずうつと響いている感じになつてくる。水中のキラキラした波の泡が見えてくる感じになつてきている。ま、仕上がつたらこの場で発表したい。(がそれは無理か。)

毎日、海に出ているが、ほんとにその度にインスパイアされる。その一つが食欲であつたり、曲であつたりする。

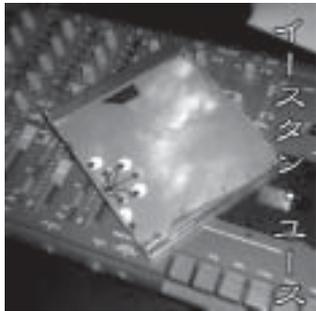
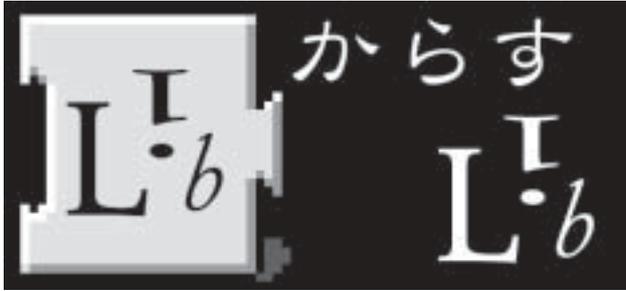
今夜は、BEATLESの「マザー・ネイチャーズ・サン」を聞いて眠るとしようか。でもあれはちよつと枯れた感じがするから違うな。そうだ、BEACH BOYSの「グッド・バイレインション」だ。これだ。

それではみなさん、また。

## Rei's Gallery



今、私のいる鎌倉のアトリエには暗室があつて写真が焼ける。高校生の時よく写真部でもなくせに、こつそり学校で写真を焼いていた。暗室独特の酸っぱい臭いがなんとも懐かしい。私は写真現像のスリル感が好きだ。暗室だから当たり前だけど暗闇の中で作業していく行程と、印画紙に像が浮かび上がるまでの緊張感そして、浮かび上がる瞬間の不思議な現象が、たまらない。というわけで、今回は写真の作品です。



**L.b** CDs

『雲射抜ケ声』

eastern youth

坂本商店、1999年、

TFCC-88147

最近のバンクを聞いている人達特に僕の周りにいる人達は、たぶん「なんちゃって」の人が多くと思います。まあ僕も勉強中なのでなんとも言えませんが、でも、少なくともこういう人達よりは知っているつもりです。

今の日本のバンクをどう見るか。中にはすごくイイと言う人もいます。でも実際聞いてみるとどれもパツとせず、ファンの人には悪いのですが、なにがいいんだって言うくらいです。今の日本のバンクを支えているのが「なんちゃって」な奴らなのではないでしょうか。まあ僕が何を言ってもきつと変わることわらないでしょう。

で、今回僕が紹介するのは、そんな日本のバンド、イースタン・ユースです。あんなだけ言つといて日本人かよと思うかもしれませんが、それでも全部が全部悪いというわけではなく、中



『1,039/Smoothed Out Slappy Hours』

Green Day

ルックアウト、1998年、TFCK-87161

にはいいバンドもいます。イースタン・ユースは、はっきり言ってルックス的には不細工で、特に女性なんかは聞く気になれないかもしれませんが、聞いてみたらびっくりすると思います(良い意味でも、悪い意味でも)。

(くわ原)

アメリカのとあるところにジョンという男がいました。彼はあるバンドのドラマーとして頑張っていました。しかし、ジョンはそのバンドを離れなければならなくなっていました。お勉強の為に彼は本当はバンドを続けていきたかったのかもしれない。でも、ジョンは両親に「俺はバンドを続ける」と言えずに大学に行くことになり、完全にバンドを離れることになりました。

ジョンが辞めたそのバンドは、数年後、メジャー・デビューし、四枚のアルバムを出し、今も活躍しています。ファースト・アルバムは一〇〇〇万枚を越すヒットとなり、グラミー賞を獲得することもできました。

その後、ジョンがどうなったのかはわかりませんが、彼はやっぱり後悔しているのでしょうか。

(くわ原)

『アウェーで戦うために』

村上龍

光文社、2000年

ISBN4-3349-7284-5



三月三四日、サッカー日本代表がフランス代表と一戦交えた。昨年六月、ハッサン二世杯というモロッコでのエキジビジョンのとき以来であった。世間はこれに大いに盛り上がった。というのも前のW杯優勝国のフランスと二一二のドロー(最後はPKで負けたが)という誰も予想しなかった大健闘を見せていたからだ。が、結果は？本気を出したフランスの前に五―〇で粉々に砕け散った。が、今月末にはスペイン代表との親善試合がある。今度はこれに向けて複雑な気持ちをはらみながら盛り上がりつつある。

なもので、それはJリーグの発足と共に生まれ、九七年のW杯アジア地区予選での、カズの代表落ち、そして翌年の本戦での惨敗で完璧に弾けたと思う。がそれで完全に泡まつと化したかというところでもないようだ。ちゃんと、しっかりと地に足付けて試合を楽しみ生み出したと思う。

では、それはJリーグや日本代表の力のお陰か、というところでもない。それは、ヒテを通してみたセリエA、そして日本代表戦を通して見た外国の格上の代表のパフォーマンスの力によるものだろう。その証拠。Jリーグの観客動員数減少するだけして底を打ったままであり、テレビでもちつとも視聴率をとれない。その一方、日本代表戦になると例えば国立競技場は満員になるし、テレビの視聴率も三〇〜四〇%へと一気に跳ね上がる。テレビでいうならもう一つ。セリエAを全試合放送しているBSスカパーへの加入世帯は今や二五〇万に至るほどである。そりやそりだよ、サッカーの素人の



自分でさえ、セリエAの試合の後にJリーグのものを見たら、まるでK1のあと、大仁田戦を見ているかのようなギャップを感じる。ちんたらちんたらしたままごとみたいなボール回しに見えてくる。そのくせ格好だけはつけたがるのがいついっばいいるから、なんか笑えたりさえて悲しい。

「ほんの瞬間集中力が途切れたり運動量が落ちた方が負け、ほんの瞬間のチャンスをゴールに結びつけたほうが勝つ、これほど残酷なスポーツがヨーロッパ人は大好きなのだ。」

「アウェーで戦うために」という村上龍のサッカーをネタにしたエッセイ集からのものだ。そして最後の章でこうもいつている。

「既得権益に縛られ、未来をイメージする力を失った守田派の政治家と、好きなことを見つからないと眩くフリーターと、ただ生活に便利だから公園に居着いてしまうホームレスが重なって見える。」

そう。この人たちは集中力と運動(活動量)からは無縁である。が、今の日本社会でとても目につく人たちでもある。そしてそんな社会のサッカーの代表が軽くフランスにあしらわれたわけである。



ショー・ミー・ラヴ  
(Fucking Åmål)

2000年公開(スウェーデン)

ビデオ・DVD:パイオニアLDC

監督・脚本:ルーカス・ムーディソン  
出演:アレクサンドラ・ダールストレム、レベッカ・リリエベリ、エリカ・カールソン、マティアス・ルスト、ステファン・ヘルベリ

期待せずに観たおかげで得をしたような気になる映画がある。この作品もそのひとつ。予想に反して、かなり良い。設定や世代、ロケーションなどなど、全く異なるものの、ある意味で『小さな恋のメロデー』を髣髴とさせるような、そこはかとなない切なさもある。

スウェーデンのしよぼくれた町に住むふたりの中学生、アグネス(レベッカ・リリエベリ)とエリン(アレクサンドラ・ダールストレム)。方向性の違うふたりの、あつという間に通過してしまふ特別な瞬間、誰にだってあるのだからけれど、ほんやり生きていると自分でも気づけないような。

魅力的な少女たちだ。このふたり以外では絶対に成立しなかっただろうな、というほどに。

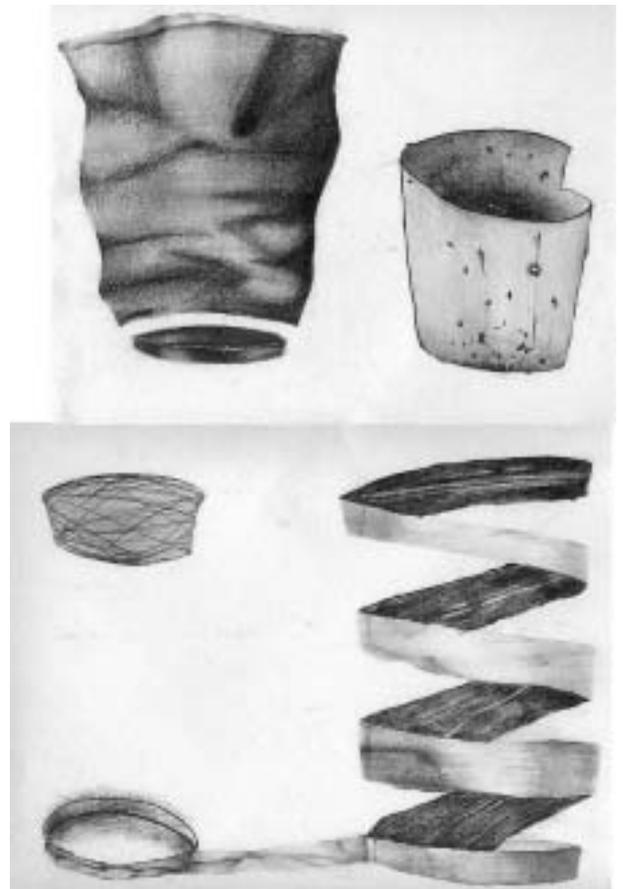
同性愛云々という文脈で取り上げられることがほとんどかもしれないが、それ以前に、これは優れた少女青春映画である(そんなものがあるとして)。彼女たちの原因不明の鬱屈したエネルギーは、私の周囲の小娘たちの幾許かが吐き出すものと共通だ。そんな少女像をきちんと描けた映画は滅多にない。文学にだってそうそうは見当たらない。その一点だけでも評価に値する。大したものだ。

同世代の女の娘たちにはどう受け止められるのだろうか。知りたいような知りたくないような。

(圭太)

Rei's Gallery

【カミコップのかたち】



からす新聞お休みの間、3回も引越しをした。  
中野↓鎌倉↓茅ヶ崎↓藤沢。とんでもないハブニングに遭遇してしまい、巡り巡って現在、藤沢市鶴沼海岸で暮らしています。  
景色、空気、気温、臭い、が中野に住んでいた時とは違って日々発見の連続。大きな発見は、冬の海岸は意外と暖かいこと。  
こと。海から吹いてくる風が柔らかな冷たさと湿度で、気持ちの良い寒ささ? というの  
かな? 実際、海岸に立ってみたいとわかない、ふしぎな寒さなんですよ。  
小さな発見、こっちの方が私にとつて重要だったりする。これは家の中で

の生活で起ることで、また自分自身の発見でもある。  
なんてことない、掃除、洗濯、料理の中の発見。  
実家にいるときは、めんどくさがりながらやらされていた事が、自分の事となると、掃除ならばかびかになるまでとか、料理なら自分テイストになるまでじっくり作ってしまう。妥協せず。  
私って案外料理好きかもな、私って頑固かも、なんて発見。  
そんな発見の連続が、作品を作っていく上では大切なんだなあと、実感しています。  
なんてことのない、つまらない事、物でも視点を変えれば面白い。  
というわけで、なんてことない紙コップです。





# ヤンヒポのおめでこっぽね

さてさて大変久しぶりの執筆活動だ。何を書こうか色々迷った挙げ句、物議を覚悟で疑似現世にある光と影の境界を払拭しようと思う。

ある熱帯夜の事だ。エアコンを全開運転してかろうじて平静を維持していた。そんな一つ間違えば幻覚を見てもおかしくない狂気の中、いつもの通り全世界の知識をひけらかす者共の要求に答えていたのだ。

早い話八月の深夜、寝不足でもうろうとしながらインターネットのホームページを見てあるいていた時の事、自動受信設定してあるメールソフトが新着メールの受信を告げた。何の気無しに受信ボックスを覗いてみると、ある「出会い系サイト」と言われる見知らぬもの同志を引き逢わすホームページの宣伝だった。普段であれば、いわゆるスバムページの宣伝するのだから、その日は蒸し暑さも手伝い、いつものしない事をするタイミングだった。メールにはそのサイトへのアクセス方法が記載されていたので早速ブラウザを起動した。

表示されたホームページは「ごちゃごちゃとバナナ」広告が配置されていて決して誠実とは言えない様相

**Member's Details**



45 years old  
from Arkansas, United States

---



25 years old  
from Florida, United States

---



44 years old  
from Maine, United States

世界のそんなサイト

だった。そして、見知らぬ異性と知り合う方法というの、性別によって分れた掲示板に自己紹介と相手に対する希望を書き込んでおく。それを見た異性を書き込みに対してメールを出すという仕組みだ。ただ、いきなり本名やメールアドレスを公開する者はまずいない。無料の転送専用アドレスを使用するのが普通だ。また、そのサイトは男女とも無料で利用する事のできるモノでそういうサイトの場合、圧倒的に男性の比率が高いのだ。また、個人を特定するプロセスが無いので匿名性も非常に高い。そうなる、全くのデタラメを書いても確認のしようが全く無い。男性が女性の振りをして書き込みをするネットオカマ(ネカマ)も多数見受けられる。全くの余談だが、男性比率が圧倒的に多い場合、男性の側からすると気に入った女性にメールを出したとしても、同じように多数の男性からメールが来ているはずなので、よほどインパクトを与えないと女性からの返事が来る事は稀である。

流石のやんひぽもそんなサイトを利用する気にはなれない。ただ、これで終わってしまったもジャンクメールを読んだかいが無いので、ごちゃごちゃしているバナナ広告を丹念に見ていた。するとあるバナナに「男性対女性の比率が3対5」というバナナ

が有った。バナナ広告というのは大体それ自体をクリックするとそのサイトへリンクしているのだ。その「3対5」サイトが表示されると、前述のサイトとは打って違ってすっきりしている。これなら登録してみても良いかもしれない。トップページの解説を見ても女性が女性の為に運営しているような素振りを見せる。サイト運営者曰く「真面目な出会い」だそう。さらに、女性の利用は一切無料だが男性が利用する場合は有料でもクレジットカード決済をしないと登録できないようになっていた。またまた余談だが、日本という国はまだまだカード文化が根づいていない。パブル以降クレジットカードの出し渋り現象のおかげ(カード発行の審査が厳しくなったとされている。実際はざるのような審査ではあるが)で現在クレジットカードを所持しているとそれだけで身元が確かだと幻想を抱いているのが企業も含めて大半である。かく言うヤンヒポは住所も定職もろくに無いのに、普通の社会人では持てないステータスのカードを始め、ゴールドカードなどかなりの枚数を所持している。利用限度額を合計すると、国産高級車が楽に買えるくらいにはなるだろう。それでもカード所持者は身元が確かできちんとした社会人だと見られてしまうほどカードに対する認識が甘いのがこの国なのだ。外国人からすればカード詐欺の温床という話はまたいつかしてみたいと思う。

そんなこんなで、身元の割れないカード(身元が割れないというだけで支払い等はきちんとしていく)を使い件のサイトに会員登録をしてみた。即時受信を済ませ、次の手続きは自分についての細かい情報を入力していく。大体二〇ぐらいの質問から選択肢を選んでいく方式だ。その中には、年収や住まい、身長、性格なども含まれる。また、コメントボックスに自分のPRを書くようになっていた。また、好みの異性に求めるタイプを書く欄も有った。ただ、ここで本音を語っているかどうか誰にも解らない。ただ、クレジットカードを持っている人間なのでウソをついても身元が割れるからウソはつけないだろうという論理の上に成り立っている。全くナンセンスもはなはだしい。因に、男性会員の月会費は一五〇〇円だったはずだ。もう残り行数が少ないので、先に言ってしまうが、そこで知り合った女性達はヤンヒポの申告を全く疑いもせず信じきっていた。というか、今でも信じている。また、女性側の申告にもさほど偽りが無かったように思えるのも事実だ。なんという危険に満ち溢れたた成り立ちであろうか。

もも様へメールを出す

## 日本のそんなサイト

登録日: 2001-01-18 (更新日: 2001-01-18)

ID	ニックネーム	血液型	B	職業	会社役員
年齢	生年月日	体型	普通	身長	155 ~ 160 cm
最終学歴	年収	現住所	東京都	出身地	京都府

大学の卒業生、年収 500万~700万、結婚 しない、現住所 東京都、出身地 兵庫県  
 性格 あかるい/負けず嫌い/甘えん坊、特技 ドライブ/音楽/旅行  
 好きなタイプ やさしくて、いろいろな話ができて、自分や他人を大事に出来る人。夢を持って、いつも、一生懸命に生きてる人。子供が好きな人。海が好きな人が理想です。  
 自己PR 弟の会社を経営しています。パッですが、協議離婚の際に、親権はとれなかったもので、今は、独りです。もともと、スチールモデルのような仕事をしていて、今は、女性向けの会社を、自分で立ち上げました。仕事はですが、やっぱり、たまには、いいですね。相手の気持ちを、大切にしてくれる人、仕事の話を楽しんで聞いてくれる人と、一緒に前に進んでいけるのが、夢です。早く、で、ながら、したいです。

ここまでの、ヤンヒポの登録作業が完了し次はいよいよ相手探しである。大勢の異性会員の中から自分の好みに合うモノを選び出す訳だ。残念ながら予定行数が来てしまったので今回はこまめにしよう。しかし、それだけではあまりにも申し訳ないので、次の回に登場する女性達も含めてプロフィール(プロフィール)を公開してしまおう。万が一、次回の掲載が無かったら傷害致死事件が発生したのと思ってしまう。

Rei's Gallery



「海のスケッチー茅ヶ崎」  
 烏帽子岩が良く見えて、海水浴客というよりはサーファーが多い海岸沿いを、江の島方向に向かってサイクリングする。夕方の海は昼間と違って風が吹いて涼しく気持ちいい。浜辺で沈んで行く夕日をぼーっと眺めているのもいい。私は泳げないからこんな感じの、海の楽しみ方をしている。サーフィンやらないの？もったいない！なんて言われてしまう場所、茅ヶ崎に引越したのです。

ろんとん つうしん  
**London Report**

#03 ホームステイ

初め三ヶ月は英語に慣れるためにホームステイしよう。ここに来る前はそう考えていた。気がつけば、もう五ヶ月以上もここに居る。ホームステイで三ヶ月、トータルでの勉強に一年、と考えていたのも昔、今じゃ二年か三年はきちんと英語が出来るようになるには欲しいところである。とは言っても、別に勉強を意識して何も五ヶ月以上も今の家にいるわけではないのだ。ホームステイは特に当たり外れが有ると言われているが、僕は運が良かったらしい。なかなか、良い家族に恵まれたと思う。

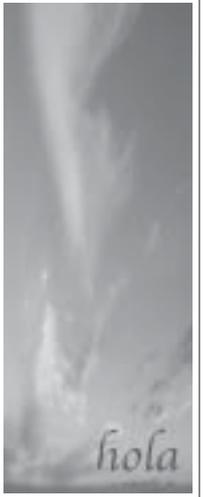
我が家のホストファミリーは奥さんがアイルランド人(マギー・?感)で旦那がポルトガル人(ルイス・三三歳)の夫婦で、ルイスは離婚歴が有るらしく前の奥さんとの娘(ホープ・五歳)が二週間この週末に泊まりに来るという家庭。友達のスティー先と比べて、ごくごく一般的な庶民の家である。ルイスは小さい頃、家族ごとこつちに引越してきて二十年間イギリスに居るらしい。ラテン系のノリで調子は良く、約束は当てにならないのだがいい奴で、来たばかりの頃は「いぶん」と親切にしてくれた。たまに夕食の後などに「コヒー」かビールを飲みながら二人で色々話すことがある。五ヶ月の間に「いぶん」と色々な話題に触

れたような気がする。彼の大酒飲みで厳しい親父の話、半分アル中の弟の話。入れ墨の話。彼は入れ墨が右肩、左肩、首の後ろにと三ヶ所あって、新しいものを胸に入れるというので相談を受けた。結局マギーの反対を押し切って僕が縦書きでレタリングしてあげた「我、神と共に歩む」が右の胸に、マギーの名前が左に入った。他には仕事の話、友達の話、好きな音楽の話、イギリスにいる外国人の話など様々。彼はヨーロッパ人で小さい頃からこつちにいるのにも関わらず、それでも外国人という肩身の狭い思いには覚えがあるらしい。勉強が嫌いで学歴がないのも多分関係してるだろう。そんな所が彼が僕らに親切な理由にも繋がっていると思う。よく「凄く遠い外国から、言葉も解らなくて来た人に、親切にするのは当たり前だ」と言っていた。どれも、僕のつたない英語に合わせて語られ、話し合われるのでたいした内容ではないが、それでも気持ちちは通じてるような気がする。

しかし、どんなにホストファミリーがいい人達でもうまく行かない時がある。ステイする側がナーバスになっている場合もあるし、お互いのちよつとしたすれ違いから、関係が悪くなってしまったり。友達などで、ちよつとしたきつかけから途端に関係が悪化して行った例はいくつも知っている。やはり、元々が赤の他人で、基本的にはビジネス上の関係だし、お互いがお互いにとつて外国人だということもあって、ちよつとの不満やすれ違いがあると、それがどんどん膨らんでいってしまうらしい。僕が幸運だったのは、ルイスやマギーと色々な話が出来たことだろう。やっばり、どんな関係どんな状況でも人と話す、コミュニケーションを取るといふ事は大切なように思う。

一度ルイスと映画を見に行ったことがある。The Big Red One。レストラスクウェアには新作ではない映画を安く見せる映画館が有り、そこでやっていた。僕が、オスヌメの映画だからせひ見に行つて見てくれという、じゃあ一緒に行くという事になり、彼のおんぼろワンボックスに乗って二人でレストラスクまで行つた。映画の時間はまだ早かったので近くのバブで軽く一杯やつてから映画館へ。思いの外混んでいて、二人別々に座ることになった。映画が始まってから僕は思った。「しまった、英語の映画じゃない。もしかしたらルイスは字幕が読めないんじゃないだろうか……」映画が終わり、僕の前の列に座っていた彼の顔を、立ち上がった際に見たら泣いていた。彼はイタリア語が完ぺきに解つたらしい。一九〇センチ以上もあり、身体も鍛えてる大きな男が涙目で僕に笑いかけた。「最高だったよ!」

帰りの車でも彼は始終ご機嫌だった。イタリア語が出来て本当に良かったとも言っていた。どうやら友達みんなにその映画を宣伝するつもりらしい。僕がその映画を好きだと言いつつ、彼もそれに感動した。そんな事からでもコミュニケーションは成立すると思う。何も、話をしなくちゃいけないという事では無いらしい。相手が何を考えていて、どんな人間なのか、それが解る事が大切なのだろう。僕は何だか、彼をイギリスで最初に出会った友達のように感じている。



そういう言い方があるかどうか知らないが、気持ちのうえでは遙か彼方、また、極、西のスペインへ出張ということになった。これが毎度のこのように、前の晩は徹夜で図面を描き模型を作り、結局空港への電車で寝ることになる。今回は加えて、頼みのibo okが調子悪く肝を冷やしたけれど、ひとの手をかり知恵をかりてなんとか事無きを得た。

さすがに、こんな時期にわざわざ外国へ出かけようという人は少ないようで、快適に手続きが済んだのはありがたい。疲労した身体には、旅の楽しい気分はこれだけでもなく、そそくさと定められた席に座りベルトをすることさえ忘れてしまう。

やがて、九十九里の沖で螺旋を描きながら上昇をつづける窓の下には、次の飛行機が、我々が今来た航路を飛んでいるのが見える。座席に埋もれながら、そんな光景をなんだかとても新鮮に感じた。両翼の力でなんとか空中に浮かび、徐々に自律的な飛行へと移りつつある、緩やかな加速。空気へとしなやかに溶込んでゆくかのように。

旋回する機体が滑りゆく、翼が見えない気体と押し合い、しなるのがわかる。純粹な力のバランスの上に描かれる理想的な航跡。窓の外をとんでもない速度で反対に去り行く別の機影。前進する以外完全な安定状態。こんな近くでそのようなものを見てよいのかと思いつつ、緩慢な思考は、多様な飛行機の動きをただざれいだと思いついて追っていた。

遠くの地にできるだけ早く行くこと。空を飛ぶこと。そのような目的を達成することではなく、テクニカルに研ぎ澄まされた設計の美しさと、そこに派生する自然とかかわりを、なんだか大切なことのように感じていた。

この前来たときの航路は秋晴れで、遠くに富士山が柔らかな陽射しをうけ、眼下に広がる関東平野を一望に、上越と奥日光の山々のまだ深い緑の褶曲を、なんと豊かな国だと感じていた。それほどの間もなく日本海へと抜けてしまったものを、今回はまったくの曇天に視界を遮られ、窓のすぐそばで、翼が切りゆく空気の粒子の流れに見とれている。

地球はやはり丸いと思うし、人も何も全て地面に足をはりつけているのだと実感する。大気さえも重力からは逃れられないらしい。

遙か彼方に、途切れそうになりながら繋がる柔らかな曲線。光の美しい変化。まるでフォトショップで加工したように、青からペールブルーそして淡いオレンジと白の混ざり合った空間。大気の密度が濃くなつていくような、屈折率の変化。すべてが水平につながら。まるでモニターの上で画像を思いきり横にデフォルメしたように、連続して存在する。水と岩石の塵が、だんだん濃度と姿を変えて積層している。反対に、果てしなく広がる圧倒的なブルーの領域。このうえにはもはや何も存在しないのだ。

このようにしているところ、思考はほとんど大気圏外へ、宇宙へと拡散し、ついには我々の存在さえも空であるというリアライズするのだが、それはまた考えるに留めておこう。

太古から気の遠くなるような年月をかけて今に至った、自然の流れを思うと、世界はどれ程変わってきたのか、あるいは人間はどんなに変化するかと問うばかりである。新たなテクノロジーが見えないものを見せてくれる。新しい社会をつくり、人を生み、異なる世界観やものの考え方を示し領域を広げてくれる。そのようにして我々は進歩してきた。一方四〇〇年前も昔につくられた曲に、清々しい気持ちを抱いたり、もつと

古く建てられた寺院に創造への意欲がかき立てられるのは、いったい人間の変わらぬ部分のおおきことなのか。変わらぬ形とデザイン。これから行くのは、赤茶けた台地。我々の国の対極にあるような乾いた世界。抽象的であるよりは実体的な世界に生きる人びとのように感じる。闘牛のように顔を合わせないと物事が進まない、仕事をすることでは少々気長に構える必要のある相手。でもよいものをつくるためには、時間やお金や法律の枠組みを取り払ってくれるよいところ(たぶん)。

はるかなる時の流れ、空間のつらなり。希薄な空気の流れに包まれながら、逆に、地球の重たさを感じ、圧倒的なものの世界を眼下に思い、不思議な気持ちでキーボードをたたいている。減圧のために身体とともに頭もインフレーションしたのだろうか。現実。食事が来たようだ。シベリアの上空を飛んでいるはずだが、雲に覆われて今は何も見えない。秋の空は天高くというものの、やはり飛行機の方が高いようだ。(篠崎健一)



Rei's Gallery

「海のスケッチ」

私の住むお隣の海、勝山に行ってきた。波は穏やかで波音が微かに聞こえる、静かな海だった。私の行った海岸には浮き島があつて、夕方、辺りが暗くなると島のシルエットが黒く浮かび上がり、まるで空と海に浮かぶ影絵の様になる。そして海岸線は湘南方面に向かうにつれて、茶色とオレンジの層ができていく。これは、湘南の海と空気の汚れによって見える現象で、いかに湘南が汚れているかという証拠を見せつけられてしまった。というわけで、海をスケッチしてきまして。次回はお隣の住む湘南の海、江ノ島辺りをスケッチしてこよう！

# アナグラム

## How to play Anagram

アナグラムとは、文字の並び替えで楽しもうということである。  
 アナグラムは、一種の暗号として使われ、ノストラダムスも使っていたそうだ。

いざ並び替えたら、あとはその解釈を考えるのも、アナグラムの楽しみ。そこで、例の“911”に関連する言葉を選んでアナグラムしてみよう。それぞれの言葉の持つ裏側の意味を垣間見ること、あるいは可能かもしれない。



### ● 2001911

⇒ 1920110 (1920年1月10日=国際連盟成立の日)

第一次世界大戦の戦禍を教訓に、アメリカ合衆国大統領ウィルソンの提唱によって設立された。しかし、当のアメリカは議会の反対により不参加。ヨーロッパに代わって世界のリーダーとなりつつあったアメリカの不在により、当初期待された機能を発揮することなく、次の大戦の勃発を許したことは衆知である。

この日は、世界史の表舞台における、わがままなアメリカの登場記念日であり、アメリカの意のままに操られる国連誕生の日である。

2001年9月11日。この日をきっかけに、いよいよ国連の無力さは疑いようがない。やりたい放題のアメリカの御機嫌を伺いながら、安全保障理事会はおざなりの決議を繰り返すばかり。例によって、都合のいいときのみのアメリカの隠れみに利用されるパターンである。このまま国連は、ますます形骸化への道をまっしぐら。日本は常任理事国でパンザイ。そうこうしているうちに、アメリカの一人勝ちに甘んじるくらいなら、世界は冷戦時の二大超大国時代を懐かしみ、やがてはアメリカ、EU、そして日中韓を軸とする東アジア連合の均衡の上に成り立っていく道をとることになる。

2001年9月11日は後世、実質的な国連終焉の日として語られるだろう。

こう解釈をひねり出してみると、ノストラダムスの解釈をしている人の気持ち、ほんの少しだけわかる気がする。

### ● Osama bin Laden (オサマ・ビンラーディン)

⇒ “Lean on mad bias.”

「気狂い性癖に頼れ」

誰にでもマッド・バイアスはある。だから、でっかいことをやる時には、そうしろということ。

### ● Taliban (タリバーン)

⇒ bat nail (こうもりのツメ)

哺乳類か鳥類か、どっちつかずの卑怯者のたとえにされてしまう不幸なコウモリ。そのツメでしっかりとぶら下がり、世の中を逆さに見る。

ブッシュは、「われわれにつくか、それと否か」と世界に迫った。そもそもは素朴な神学生集団であったタリバーンは、「否」と言って散った。

「コウモリのツメ」とは、「争いあるときは、どちらにもつかず、そのツメでしっかりと自分の枝をつかみ、世の中を逆さに眺めるべし。さすれ

ば世界が見えてくる。そうして、嵐が過ぎ去ったら、自分の好きなところへ飛んでいけ」という意味である。

このことわざ、コーランに書いてある、などと言ったらタダでは済まないなので、そんなことは言わない。

### ● afghanistan (アフガニスタン)

⇒ “Sigh? Fat Nana.”

「ためいきついているの？ファット・ナナ」

ちっちゃな子どもが、子守役のファット・ナナに、「ため息ついているの？」  
 って聞いている。ナナはもちろん、昨今のアフガン情勢に心を痛めているのである。そういうナナが、ナナのため息が世界中に漏れている。Fat Nana を、この子はおばあちゃんの名前として使っているが、本来の意味は、「ふとっちょおばあちゃん」である。

太ったナナという猫を飼ってる家があるなあ、と思って辞書を見たら、nana には、幼児語で「おばあちゃん」「乳母」の意味があると知った。そのほか nana には、オーストラリアの俗語で、「ばか」「頭の弱いやつ」の意味がある。

### ● George Bush (ジョージ・ブッシュ)

⇒ “He begs our G.”

「彼は、われわれのGに依頼する(だろう)」

Gとは、ゴルゴ13 = デューク・トウゴウのことである。高額の報酬でミラクルな狙撃を請け負い、何食わぬ顔でやってのける。しかし問題は、「彼」がだれかということである。これがブッシュのセリフならば、なぜ「われわれ」なのか。成り立ちうる解釈は、ブッシュ自ら依頼を済ませたGに、ピンラーディンがコンタクトを取ろうとしていることを、CIAがキャッチしたということか。ピンラーディンは、Gが二重取引はしないことを知っているのだろうか。

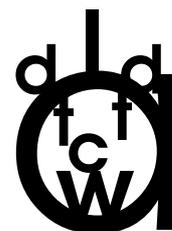
### ● World Trade Center (世界貿易センター)

⇒ wonder letter card (驚き郵便書簡)

順番どおり。

アナグラムを考えていて、こう上手くいくと、つい嬉しくなってしまう。しかし上手くいかなければ、こうなる。

⇒ re re re no



レレレのおじさんになるかと思ったら、バイキンマンであった。(これはアナグラムではない) (望月)

# からす新聞大再開

このまま廃刊かと噂されていたからす新聞がついに再開した。

誰もがよいよ廃刊かと思つたに違いない、長い長い休刊。正直なところ、我々自身の胸の中にさえ「廃刊」の二文字が横切つた瞬間だつたのである。だが、しかし、我々はだてに休んでいただけじゃない(はずだ)。あんな連載も始まつたし……こんな連載も始まつたし……始まつたし……他にも目新しいものが……あ、あ、見当たらないけれども、一步一步前に向かって進んでいるのだ(多分)。

母体を失つたからす新聞。言ってみれば、帰る家を失つた天涯孤独の身の上、世知辛い渡世をさまよう旅人のようなものである。もはや何ひとつ憚るものはない(多分)。今まで以上に、アートに文化に葛進するのみである。今後にますます期待してくれたまえ。

再開を機に幻の原稿となりそうだった画像・文章を一挙大公開。おかげで十二ページの特大号だ。

(一面から続く)

一九七〇年前後の長橋容一郎の作品の多くは「そして、粉になつてしまいました」と結ばれていたようである。それは、この世界の真実を、少なくとも幾許かは映していたと言えらう。石は風化して粉になる。木は朽ちて粉になる。人は燃やされて粉になる。ふむ、私たちはどこへ行くのだろうか。

もっとも、確実に粉になるのは物質ばかりであり、ここに魂を代表とする非物質的な存在がかかわつてくると話が纏まらなくなる。魂は長く長く長い宇宙の時間の中のごく短い時間だけに存在するものであると考える人々。そもそも魂など存在しないのだ、と考える人々。私たちの変化は終焉とともに止まるのか。次の肉体の中で変化し続けるのか。新しい肉体に古い魂が宿る場合、私としてのアイデンティティ

は維持されるのか。やれやれ、魂を持ち出した途端に、こんな有り様である。何もわからない。

寒い冬がやってきた。寒いのはただけじゃないが、屋根付きの移動装置を持たぬ私には、雨が降りにくいのがせめてもの幸いである。しかしながら、近頃では降ってくるのは、雨や雪のように屋根さえあれば凌げるものとは限らなくなってきたようだ。空を見上げてみたまえ。ほら、正義を標榜した爆弾が飛んでくるのが見えるだろう。あれがぼくたちの町に落ちるのか。いやいや、そんなことを考える間もなく、爆弾はこの町を吹き飛ばしてしまうのだ。そして、私は、私たちは、我が家のでぶ猫は、私の世界は……。

アメリカでアフガン二スタンで失われた命は、いやいや、それに留まらず、今この瞬間に世界のあちこちで失われていく命は、どこに行つてしまうのか。肉体が活動を休止することは必ず。では、魂は……ああ、やはり何もわからない。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

4-3-44-1 Narita-higashi, Suginami-ku,  
Tokyo 166-0015,  
Voice : +81-3-3220-0644  
Facsimile : +81-3-3220-0640;  
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp

篠崎健一アトリエ

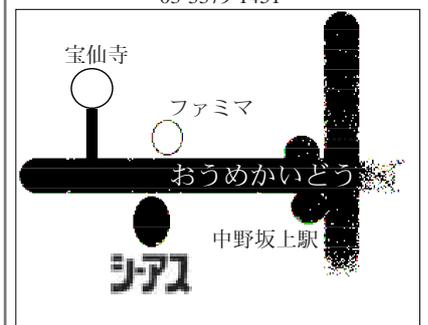
万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>

1クラス4人までの少人数制学習塾

**シアス**

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号  
03-3379-1451



**編集後記**  
からす新聞第二巻第〇号(通巻第三六号)、無事、発刊できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発刊予定日は二〇〇二年一月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。